名をば榊ミヤツコと！

天霧ありす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
名をば榊ミヤツコと！

【Ｎコード】
Ｎ２９８６Ｖ

【作者名】
天霧ありす

【あらすじ】
高校生１年生の榊（さかき）ミヤツコはクラスで『パシリ』として、悲惨な日々を送っていた。唯一の楽しみはパソコンでコメントを大量にしていくこと。その生活にむなしさを覚えながらも、自分ではどうすることもできなかった。
ある日面白そうな噂を聞きつけ、とあるサイトに飛んでみる。そこでミヤツコが眼にしたのは、電脳世界から来たという“少女”だった――

プロローグ

プロローグ

逃げなくては―

この世界、この広い世界で
一体誰がわらわの味方になってくれるのだろうか？

暗号のような幾万の数字。
崩れていく意識。
混沌とした闇に自分の体が分解されていくのが分かる

音が聞こえる
無数の音

色が見える。
何万色素の色

わらわは必死に手を伸ばした。
何かを掴むように、何かを求めるように。

――光が見える。
誰かそこにいるのか？

眩しすぎる光に眼を細めながら
わらわは尋ねる

もう駄目だ

体という感覚がない
意識だけが自分を成り立たせている要素だと感じる

このまま朽ち果ててしまうのか？
何もない無になり、誰もから忘れられる存在に

ふふ――
大罪を犯したわらわにはちょうどいい
そんな最後がお似合いなのかもしれない
このまま消えてしまおう
そうしたらもう苦しまなくて済むから

（（……キミは誰？））

――？

誰かがわらわの存在にアクセスしてきた
今やこの大海の藻くずと化している自身の存在に気づいたのか？

……胸の奥がじわりと熱くなる
まだ消えたくないと心が訴える
あんなに決心したのに
あんなに後悔したくないと決めたのに
この腕を伸ばしてしまう自分がいる

――感じる
そこに行けばいい

どんな悲しみが待っていようとも
どんな苦しみが待っていようとも

わらわはあなたを信じよう――

『名をば榊のミヤツコと！』

一

むかしむかし――そう、そんなに遠くない現実。

どこにでもある高校で、どこにでもいそうなイジメっ子にパシリにされて何でも使われている一人の男の子…

そう僕のことだ、残念ながら。クラスでも目立たない存在であり、そのためかよくイジメに遭うという毎日を送っている。おまけにパシリは日常茶飯事だ。

彼らは口を揃えて言う。

「おい、『パシリ』パン買ってこいよ」

「ふざけんな！　俺はお前等の『パシリ』じゃねーんだよ！！」

――と言いたい。

しかし現実は悲しいかな、僕はただのパシリである。しかもあだ名が既に『パシリ』であり、明白な事実なのは間違いない。声を小さくして「分かりました、ちょっと待ってて下さい」と言うしかない。

これを聞いた人は必ずこう言う。

「なんで彼らに抗議しないんだ。抗議すればいいじゃないか、嫌だって」

それは、分かる。

でもそれが出来ていれば世の中にいるイジメラレっ子は苦労しない。僕が仮に今彼らにそのようなことを言おう。どうなるかは目に見えている。
「は、お前何言ってんの？　立場分かってないんじゃねーか？」
はい、ごめんなさい。だから俺は今日もパシられている。

そんな僕の名前は、さかき榊ミヤツコと言う。

＊

「おいパン買ってこいよ」
この一言が僕の昼休みへのゴング。

目の前には制服を着崩し、馬鹿騒ぎをしているクラスメート…いや僕にとってはイジメっ子。僕はいつものように席を立ち、教室を出ようとした。
「……おい、パシリ」
僕を呼び止めたのはクラスのリーダー格である斉藤リュウだ。赤色に染めた髪をオールバックにした一昔前の不良のような高校生。彼の強面の迫力から大抵の学生は彼に対して逆らえない。

「分かってます、焼きそばパンですよね」
僕が営業スマイルで答えると、彼の周りから口々に注文が入る。
「コロッケパンでー」
「俺はいつもので」
この辺は彼の取り巻きといったところだ。実力は無いが、彼の側にいることでその恩恵を受けている家来のような存在。
「じゃあ買ってこい『パシリ』」

口々に注文されても僕は生憎聖徳太子でも何でも無いんだ。だが僕の答えはこう言わなければいけない、というか言わないと何されるか分からない。

「…分かった」

説明しよう。僕の耳のレベルは聖徳太子並にレベルアップしていたのだ！　何人もの要望を一瞬にして聞き分け、正確に把握する力を持っているんだ！　これでどんな無理難題でも大丈夫！　一瞬で解決できちゃうよ☆

なーんて僕が馬鹿なことを考えている間に、イジメっ子はまた騒ぎ出した。斉藤は昨日面白かったというお笑いのネタを披露し、お供の取り巻きが爆笑していた。気が付けば誰もが斉藤に注目している。

そんな様子を尻目に僕はそっと教室を出て、購買部へ行くことにした。

別にそんな様子に憧れているとかそんなんじゃない。そう僕は自分に言い聞かせる。第一何が楽しいというのだろうか？　お弁当を一緒に食べているだけだろう？　そんなことをしているんだったら、僕は大好きなパソコンをしている方が楽しい。

そう、楽しいんだ。

隣りの教室からもまた騒ぎ声が聞こえる。好きな人同士がグループを組んでお昼を食べる。机をくっつけて、昨日のテレビの話でもしながら昼休みを過ごす。それがどこの高校でも見られる当たり前の光景。今、僕の横を通り過ぎる教室の中でも現在進行形で見られる。

――けど、僕は、そのなかに、いない。

二

さて潜ろうか――

僕がキーボードを打ち出すと、まるでピアノを弾いているかのごとく音がカチカチとなり出す。その音はしだいに早くなっていき、僕の意識と一体化する。思っていることがそのまま画面の向こうに打ち出され、画面の中を移動する。

今日も世界中を繋いでいる世界は平和だ。
誰かが騒ぎ、それに反応し、ある人は無関心で、ある人は旅人のようにさすらう。

僕もそのさすらい人の一人だ。
ネットを行き来し、まるで野次馬がごとくあらゆるところに首を突っ込む。そして自分が訪れたことを示す足跡を付けては去っていく。

さまようひとり　ＩＤ：０００４４５２

ネット上でこのコードネームが駆けめぐる。

僕は特に相手と会話を楽しむためにやっているわけではないので、ただ自分が思ったことを少し書き残しておくだけだ。それだけだったら誰でもやっているはずだが、僕はその量が半端なく多い。

いつしか僕はネットの中でたまに現れるゴースト「さまようひとり」として認知されていった。今では現実社会での名前より、ネットでの名前の方が有名となっている。噂では僕のコメントのまとめ

サイトがあるとか無いとか。

「さて今日はどんなサイトを巡ろうか？」

手当たり次第に面白そうな記事を見つけていく。

「新しいゲームソフトの売り上げが良くない……じゃあ『駄作らしいが、そういわれるとやってみたくなる』、と」

パチパチと感想を埋め込んでいく。

僕が打ち込むと「あっゴーストが来た」「リアルタイム過ぎ」と次々とコメントが打たれていく。その様子に満足したら、また次という風に繰り返していく。こんな事をしているうちに時間は幾らでも流れていく。僕はその間リアルでは、存在しない。

漂流を繰り返しているうちに、あるサイトにたどり着いた。

「なになに、パソコンに現れる幽霊……ネットサーフィンをしていると、あるページに行き着くことがある……そこを開けてはいけない……そこは“カレラ”が住む桃源郷なのだから……って何だこれ」

変なオカルトの記事で僕は可笑しくて一人でツッコミながら笑う。

「“カレラ”って誰だよ……おっと手が止まってた。次々！」

またひたすらコメントを残していく。

「もし、ネットの中に誰かが住んでいるとしたら……か」

この無限に広がる記号の渦は一体どこに繋がっているのだろう。僕が知らない世界がまだまだあって、その中に実は何かが住んでいたとしたら。

「……はは、馬鹿らし」

けれど、この世界は、リアルよりも、リアルだ。

三

購買部―そこはまたの名を「戦場」と言う。
パンという至極の宝を求め、大将も参謀も雑兵でさえも我が身を省みず戦いに身を投じる場。そこでは弱い者は生きられない。強い者が正義、弱肉強食の世界なのだ。

僕はそこで勝たなければいけない。勝たなきゃ生き残れない！ってどこかの漫画で読んだような気がしたけれど、僕はすでにもうパシリだった。

そんなこと言ってる場合じゃなかった。パンの山に群がる人をかき分け、なんとかお目当てのパンをゲットする。焼きそばパン、ゲットだぜー。はぁ。

勝利品のパンを手一杯に抱えながら、僕は購買部を後にしようとした。

誰かに肩を叩かれたような気がした。

「オーナだろ」
「あはは、ばれちゃった」

後ろにいたのは僕の幼なじみのおおな大名アオ。僕はオーナと呼んでいる。肩までのボブショートの髪。目立つタイプではないが、とても優しい心を持っている……と思う。少し天然な気がしないでもないが。

何でこんなに知っているか。別に彼女だからとか言うのではない。

――こいつとはただの、腐れ縁の仲だからだ。

「オーナか。びっくりさせんなよ」

僕は買ったパンを落とさない様に抱き直した。これを落としたら命が危ない。その様子を見てオーナは顔をしかめた。

「ミヤ君、何でそんなにパン買ってるの？　あっ、まさかまたクラスの男子に……！」

「そーだ、こんなことしてる場合じゃなかった！　パンだよ、パン！」

僕はパンを掴み、大急ぎで食堂を出る。

「ちょっと、ミヤ君ってば！」

オーナが後ろから追いかけている様子がしたが、そんなことはお構いなしに僕は走る。何しろ僕の命がかかっているのだ。このパンだけは何があっても届けなければいけない。

「悪りぃオーナ、また今度！」

僕は手をひらひらさせながら、光の速度で走った。

「もぅ……ミヤ君は……」

＊

仕事をやり終えたあとは気持ちがいい。爽快感で溢れている。

そう僕はイジメっ子達に無事任務を達成できたことを報告したのだ。勝利品を献上して。

「おーさんきゅ」

その一言で僕の苦労は報われた。たとえそれが虐められている立場からだとしても。

ざわめく教室。

僕はぼんやり周りを見渡す。リーダー格の斉藤リュウが大笑いするのが見えた。
なぜ教室にはグループというものが存在するのだろう。決して目に見える枠組みじゃない。そんなものは無いんだという人もいるかもしれない。

しかし、実際に存在するヒエラルヒー、階級。いつの間にか教室という空間にはそんなくだらないものに支配されていた。馬鹿馬鹿しいと思う、正直。しかし所詮そこから逃れられないのも、また事実だった。僕の机には当然誰も来ないわけで、昨日のテレビの話だとか、何が好きだとか、そんなたわいもないことを話す権利は僕にはないということになる。

だって、僕は今最下層にいるのだから。

＊

放課後になり僕は鞄の中身をまとめる。遠くで部活をしている人たちの声が聞こえてくる。夕日で真っ赤に染まった教室。もちろん、僕以外誰もいない。机に突っ伏してみる。何かを訴えるように、何かを求めるように、僕はぎゅっと顔を埋める。

一体いつまでこんな生活を続けていけばいいのだろうか。あと二年間こんな毎日が僕を待っているのか。

変わることのない現実に、僕は闇の底に沈んでしまう。

「ミヤ君？」

「……オーナ」

気がつけばオーナが僕の目の前に立っていた。栗色の髪が夕陽に染まって、彼女の輪郭をぼかしていた。

「まだ帰ってなかったんだ。これから帰る？　だったら一緒に帰ろうよ！」

にかっとオーナは笑って、僕の手を掴んだ。

「部活は？」

「今日はお休みなんだー。先生が腹痛なんだって」

「あー伊藤先生ね」

オーナは空いている手で僕の荷物をひょいと持ち上げた。おいおい、教科書何冊入っていると思ってるんだ。

「さ、帰るよ！　立って立って！」

「分かったって、立つから」

僕が面倒くさそうに立ち上がると、オーナは嬉しそうに笑った。その様子がやけに楽しそうで、僕は首を傾げる。

「なんか可笑しいか？」

「いや、ミヤ君だなーと思って」

「…意味分からん」

僕が顔をしかめると、オーナは僕の肩をぽんっと叩いた。

「さぁ帰ろ！」

「はいはい……」

僕はオーナから顔を背けた。この表情を見られないように。

本当は知ってる。友達に色々理由を付けて、放課後残っていること。そして、僕を励ますために、こうやって笑わせていること。一緒に帰ってくれること。

〈みやくん、もういたくない？　だいじょうぶ？〉

僕に絆創膏を貼ってくれる小学生の頃のオーナ。蘇る記憶。そう、うるさい音が周りに響いていた。

――あぁ僕は小学生の頃から何も変わってない。

四

僕の住んでいる家は何の変哲もないアパートだ。
外装はロマンスグレーの落ち着いた色合いで、築三十年ぐらいだろうか。町に一つあっても何らおかしくないような、そんな建物だ。

そこに僕は住んでいる、一人で。つまり僕は今一人暮らしをしているわけだ。なぜ一人暮らしをしているのかは、長くなるので話さないことにしよう。実に複雑な事情がそこには絡み合って存在している……というと格好良く聞こえるが、実際は受かった高校が遠かったというだけの話だ。

一人暮らしというのは楽なようで、実は結構しんどい。ご飯も一人で作らなければいけないし、掃除や洗濯も自分でしなければいけない。生きていける最低限の生活をしながら、なんとか僕は今日まで暮らすことに成功している。

ご飯を食べ、洗濯機を回し、僕は一服することにした。お気に入りのソファーに座り、鞄から携帯を取り出す。
気がつくとオーナからメールが来ていた。

「ミヤ君、宿題分からないよー（涙）　明日の朝学校で教えてもらってもいい？　家まで迎えに行っちゃうよ（＾＾）」
僕は嬉しくなって少しはにかんだ。本人には絶対顔は見られたくない。見たら絶対「あーミヤ君だー」と言うに決まっている。

「あれ、まだメールが来てる…」

携帯にはもう一件メールが来ていた。

「知らないアドレスだな、ダイレクトメールか？」

件名：情報求む
本文：大切にしていた猫が逃げてしまって困っています。黒い猫です。このメールを見た方はすぐに１０人にメールを回してください。でないと貴方は不幸になってしまいます。

「不幸の手紙のメールバージョンね」
一時期流行ったこともあったが、今は下火になっている。とりあえず面倒くさいので、メールを削除することにした。

「さーて、今日も潜りますか」
ソファーの前に置いてあるパソコンを立ち上げる。今日はどこを巡ってコメントしようか。

「何か面白い話題のとこ……と」
画面を流し読みしながら、それなりに興味の持てる記事に飛んでいく。いつもなら何かしらコメント出来そうなサイトに巡り会えるのだが、今日は当たりが悪い。とりあえず、何かキーワードを打って流れを変えなければ。

さまようひとり『何か面白いサイトありませんか？』
名無し『おっもしかして噂のゴースト？』
さまようひとり『何か面白いサイトありませんか？』
名無し『違うか』
名無し『最近妙なサイトがあるとか噂になってる』
名無し『画面開けたら白くなって、アウトみたいな』

さまようひとり『アウト？』
名無し『フリーズして強制終了』
さまようひとり『ＵＲＬ希望』
名無し『ここ←』

面白い情報が聞けた。これはぜひ行ってみなくては。僕は早速そのＵＲＬから問題のサイトに飛んでみた。

真っ白。

間違えたかと思い、もう一度飛んでみるがやはり真っ白。
「……釣られた」
大きなため息が自然と体からわき出る。ネットの世界ではよくあることだが、引っかかると心が沈む。

「はぁ……まぁ仕方がないか」
ホームに戻ろうと思い、クリックするが何も起こらない。
「何だ？　バグか？」
これが先ほど言っていたフリーズして強制終了というやつなのか？　画面にカーソルを合わせると、「｜」が点滅している。

「つまり……何かコメント出来るって訳か」
僕は試しに文字を打ってみることにした。

さまようひとり『釣りかと思って来てみました。やっぱ釣りですかね？』

何も起こらない。

さまようひとり『てやっぱり誰も答えないですよねー。完全に釣られました』

「――あなたは、　誰？」

目が疲れている？　違う。

いきなり文字が浮かび上がってきた。

僕は驚いて、画面を見つめる。間違いない、はっきりとそこに書かれている。

キーボードを打つ手が次に何を打とうか、彷徨う。

さまようひとり『僕はネットにコメントを残していく者です。周りにはゴーストって呼ばれてます。キミは誰？』

「――消えたくない」

さまようひとり『？』

「――私は、私の名は――」

僕は一瞬どうなったのか分からなかった。パソコンを目の前にしているはずなのに、目の前が急に真っ白になった。やがて電気を消すように、ぱっと暗くなる。そしてそのまま闇の世界に自分が漂っているような感覚。

自分が目を閉じていることに、ようやく気づけたのはそれから何分か経ってからのこと。恐る恐る眼を開こうとすると、目の前に淡い光が感じられた。

白くて、所々レモン色の光が微かに混じるそんな色。ずっと大切にしている宝石箱を開けてしまったかのような、そんな感覚。キラキラというのは語彙が少ないと言われそうだが、本当にキラキラしている。

僕は思った。

綺麗だ、と。

五

光は徐々に弱まってきた。それにつられて僕の目もだんだん開いてきた。

しかし、その目はより大きく見開かれることになる。

だって信じられるか？

目の前に、僕の目の前に……

「いやいやいや」

何が嫌だというわけではない。つまり、その嫌ではなくて、そのなんだ、その、あれだ。

「あーこれは悪い夢を見ているんだなぁ。最近パシリ生活しているから、疲れてるのかも。それに違いない、うん」

「こういう時は早めに寝るに限るよな。うん、それがいい、お休みー……」

「……って無理だろっ！　何だこの状況！？　さっきまで、パソコンで彷徨ってて、コメント残していって、面白いサイト見つけたと思ったら、それは実は釣りで、画面が白くて、それにコメントしたら文字が浮かび上がってきて、それで……それで」

僕が決しておかしくなった訳ではない。そう、いたって真面目、正直に――

「それで……何じゃ？」

「いきなり目の前が真っ白になって、真っ黒になって、黄色い光が見えて、それで…それで！」

……小学生くらいの女の子が目の前にいて！　きっと今僕の口はあんぐりと開いているはずだ。

「誰ーっっ！！！　あんた誰ー！！！！」

人に指を指しちゃいけません。言われ慣れているはずなのに、この時ばかりは僕は忘れていた。大声で叫びながら、女の子に指を指す。

「失礼な奴。相手に名を尋ねるときにはまず自分の名を明かすこと。常識じゃろうが。それと相手に指さしは失礼じゃ」

「いやいやいやいや、指指したのは悪いけど、あんた確実に不審者だろうが！　どうやって忍び込んだんだ！　はっまさか、窓が開いてたんじゃないだろうな？　ここ最近物騒な世の中だから、気を付けてはいたのに……」

ぷちっ。少女から何かが切れる音がした。

「はよう名を名乗らんかいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい！！！！！！！」

はぁはぁ。

地面を揺るがすような大声。

女の子の気迫に思わず圧倒されてしまった。暫くフリーズした僕はようやく我に返る。

「……とりあえず、名乗らないのもあれだから、名乗るわけで、その、僕は、榊ミヤツコですが、えーっと、あの、そうです」

なんだか相手に飲み込まれてしまい、何故か下手。

「ふん、榊……ミヤツコ。貴様がわらわをここまで呼んだのか……。いや、信じたくない事実じゃ……これは。まさかこんな見るからに情けない奴が、わらわを」

（……堂々とけなされている……）

少し落ち着いてきた僕は、ようやく女の子をまっすぐ見た。髪型はおかっぱ頭。確かこんな人形を見たことがある。市松人形……だったか。

その市松人形に違わず、肌は日焼けを知らないがごとく、白い。浮世離れしたその白さは、凛とした趣を彼女に与えている。なぜか浴衣のような服を着ており、袖がお茶を飲むたびひらひらと揺れている。ある人が見たらコスプレをしているようにしか見えないだろう。

……少なくとも僕はそう見える。

特に印象的なのは、目。

何も悪いことをしていないのに、こちらに罪悪感を感じさせる、威圧感のある目。

「……だが、今更戻れぬ。……戻ったところでどうなる訳でも……

わらわは……」

何て古風な呼び方。今時そんな自称詞を使ってる人なんて初めて見たよ。

「……どうやら腹を括らねば、いけぬようじゃ」

彼女の目が僕の目を射抜く。その目を見ただけで、彼女がこれから大切なことを僕に告げようとしていることが分かる。

（一体どんな言葉が告げられるんだ……？）

僕は身構えて背筋を伸ばした。

「では、ミヤツコ。今日からお前はわらわのおきな翁じゃ。しっかりわらわを世話するように」

……は？

「すいません、ちょっと理解に付いていけないので、もう一回言ってもらってもいいですかね、いや、お願いします」

「今日からお前はわらわのおきな翁じゃ、しっかりわらわを世話するように、と言ったんじゃ。もう二度と同じ事は言わぬ」

翁って何だったっけ。何か古典の授業でうっすら習った記憶がある。確か、そう、あの有名な物語に出てきたはず、何だっけ。こんなことならもっと勉強しておくんだったよ……。

「それにしても、わらわの背は低いな。まるで幼子ではないか」
少女はくるりと一回転して、自分の姿を眺めた。
「……どこからどう見ても、小学生にしか見えませんが」
「……流石のわらわも焦っていたということか。まぁ良い。そのうち何とかなるだろう……それより翁」
それは僕のことですか？
「心の中で問わずとも、貴様に決まっておろうが」
「……エスパーかよ」
「とりあえず、わらわはもう決めたのじゃ。こうなれば何が何でも、貴様に頼るしかない。それしか生きる術が無いのじゃ」
「どんだけ大げさ……」
少女は長い袖で口元を隠し、僕を見下した目で見た。何、なんだなんだ。
「では、寝る。疲れたゆえ」
「えっちょっ……」
この言葉を残して、女の子はすやすやと眠ってしまった。僕が愛用しているソファーの上で。急にばたりと倒れるものだから、ビックリしたことこの上ない。よほど疲れていたのだろうか目の下に隈ができていた。
「一体どーなってんだよ……」
目の前には小学生くらいの女の子。僕は一つの可能性にかけるこ

とにした――そう夢オチ！　これは夢なのだ。
とんでも仰天なことが起きたと思ったら、実は夢でしたーなんてことは漫画で良くある……はずだった気がする。僕も色々考えなければいけなかった。なぜ女の子がいきなり突然現れたのか、これからどうすればいいのか、実は夢オチだったとかとか。

……しかしあまりの出来事に頭の方が現実を拒否し、気が付いたら僕も夢の世界に引きずり込まれていた――

六

チュンチュン。

気持ちの良い朝は小鳥の声で目が覚める。暖かい日差しが僕の顔を照らし、徐々に意識を現実へと覚醒させていく。夢からさめるその一瞬が残念でもあるが、新しい一日への始まりでもある。

そして今日のパシリ生活を思い浮かべ、ため息をつくのだ。つくのだ、つくのだ……

しかし僕はベッドで寝ていない。何故か床で寝ている。堅いフローリング。背中が痛い。つまりこれは何を意味しているか。

「……夢オチじゃなかった……」

昨日のことは夢でしたー。

お騒がせしてごめんなさいー。

今日の朝はそう自分に謝るつもりだった。つもりだったのに……僕のソファーには小学生くらいの女の子が猫のように丸まって寝ている。

……夢じゃなかった……おいおい。

ぼさぼさの寝癖だらけの髪を撫でつけ、僕は女の子をじっと眺める。昨日は驚いてそんなに見ていなかったが、まるでお人形のように可愛い。マシュマロのような肌をしていて、睫が光に当たって少

し輝いている。西洋的な可愛さではなく、和風の姫といった所だ。
「……可愛い……かも」
ピンポーン！　ピンポーン！
インターフォンが僕の意識を一気に覚醒させる。慌てて玄関の方を見る。
「おはよーミヤ君！　昨日メールしたんだけど、見てなかったかな？」
オーナが勢いよく部屋に駆け込んできた。この聞き慣れた声。あぁ僕の日常が戻ってきた。
僕が寝ぼけて手を振ると、オーナは僕の顔にぺちぺちと手をやった。
「ミヤ君ー、まだ寝てるの？　意識がついていってないよ？」
「……平和だ」
「？」
今日一日の開始だ。普通の、ごく普通の。
「ねーミヤ君。この子誰？」
「……」
オーナが例の少女の方を見て、首を傾げている。
答えられるはずがない。というか僕の方が教えて欲しい。
「可愛いー！　着物着てるし、なんか昔のお姫様みたいだねー」

「いや、おかしいから！　なんか疑ってよ！」
「肌白いねー。いいなぁこんな美人さんに生まれたかったよー」
聞いちゃいねぇ。
「……んにゃ……」
急に聞こえてきた騒音が彼女の意識を現実に引き戻しつつあった。まだ寝ていたいとばかりに目をこすりながらも、小さな体をゆっくりと起こし始めた。
「あぁよく寝た。やはりまだわらわには疲れが残っているようじゃ」
いや、僕の方が昨日から精神的な疲れが残っているんですけど。昨日からおかしなことが起こりすぎて、どうしていいか分からないんですが。
「お茶」
一言少女が言葉を発する。おちや？　何だったっけ？
「お茶、じゃ。聞こえなかったのか？」
「ミヤ君、お茶、お茶！」
いやいや。
「のどが渇いた。この家にはお茶も無いのか？」
「確か冷蔵庫に麦茶が入ってるはずだよ！」
「あ……はい」

あぁ情けない僕のパシリ魂。自分の残念な姿に心底嫌悪感を抱きながらも、いそいそと麦茶を用意する己がいることはまた事実だ。

「お茶は疲れている時に良いんだよー！　リラックス効果抜群だしね！」

そうだ、ストレスを抱えている現代人には最適、お茶請けなんかもあれば更にグッド。そう僕もお茶が必要だ。この理不尽な現実を癒すために。

「こんにちは、初めまして。私は大名アオ。ミヤ君にはオーナって呼ばれてるの」

オーナは少女の前に座り、にっこりと微笑んだ。その様子に戸惑ったのか、少女は軽く頭をうつむける。

「……わらわは……わらわは……えっと……」

手をもじもじさせながら、必死に答えようとするその姿は微笑ましく見えた。何だ、可愛いところもあるじゃないか。

僕は三人分のお茶を机の上に置いた。

「ありがとーミヤ君」

「キミも飲みなよ」

僕がコップの一つを少女に渡すと、あの鋭い目が僕を見返してきた。うぅ……この目は苦手だ。何かを覚悟したような、そんな目つき。

「……わらわは……『従妹』じゃ。こやつの」

……ん？　今なんて言ったかな？
聞き間違いでなければ、親戚関係の単語が聞こえてきたような気がするんだけど。

「あー従妹かー。ミヤ君にこんな可愛い従妹さんがいたなんて！何でもっと早く教えてくれなかったの！」
「遠い親戚じゃ。遊びに来たのじゃ」

「……おいいいいいいいいいいいい！！！　お前いい加減にしろよぉ！　何勝手に話創ってるんだよおおおおお！！！！　いとこだぁあああああ？！？！　妄想も甚だしすぎるだろおおおおお！
詐称罪で訴えるぞ、ごるぁあああああ！」

「ミヤ君キャラ変わってるー（笑）」
「括弧笑いじゃねーよおおおおおお！」

少女はお茶をすすりながら、何かを指さした。

「……時間じゃ」
「？」
「貴様は学校とやらに行っておるのだろう？　もう家を出ないとホームルームに間に合わぬぞ。幸い今日は担任が寝坊しているようじゃから、あと三分程度の余裕はあるぞ」

にんまりと少女は笑う。
時計を見ると、８時２０分……ってあとホームルームまで１０分しか無いじゃないかあああああ！

「オーナ！！！！　急いで行くぞ！！！！」
「そーだねミヤ君！」

僕は急いで着替え、前日に用意をしてあった鞄をひったくり、そして家を出て走った。息が切れそうになりながらも、ふとある疑問が頭の中を駆けめぐった。

「……は……なんで……あいつは……先生が遅れて来ることを……知ってるんだ……！」

「ミヤ君の従妹さん可愛かったなー。またお話ししに行ってもいい？」

……聞いちゃいねえ。しかも息が切れていない……。

愕然とする僕を裏目にオーナは軽々と追い抜いていった……（涙）。

七

滑り込みセーフとはうまい言い方だと思う。
滑るようにしてドアを開け、「アウトォ！」の声を聞くことなく足を一歩中に踏み込む。

そう、ヒーローも一緒だ。彼らはピンチのギリギリに詰まった時しか現れない。そして「遅くなった……！」とか言いながら、遅れて来る罪悪感さえ無しに悪役をぼっこぼこに倒すのだ。悪役の方がはるかに時間にきっちりしていても、おかまい無し。

……つまり僕が何を言いたかったのかというと、「間に合った」ということが言いたかったと言うだけだ。

「はぁはぁ……間に合った……」
僕が息を切らして教室に足を踏み入れると、ちょうどチャイムが鳴った。

（それにしてもオーナのやつ……）

『じゃー隣の教室だから先行くねー！　頑張れミヤ君！』
ガッツポーズを華麗に決め、オーナは風のように去っていった。
昔から意外に運動が出来ると思っていたが、まさかこんなに差が開いてしまったなんて。

「さて……席に……」
そこでいつもとは違う違和感に気づく。教室が妙に静かだ。
周りを見渡すといつも中心にいるはずの人物が居ない。

（……斉藤リュウ……）

髪の毛を赤く染め、オールバックに決めている男。いつもクラスの中心にいて、僕にパシリを命じている斉藤リュウが今日はいない。ということは、だ。

（やったあああああ！　今日は何て良い日なんだろう！　吉日！　一日パシリを命じられることもないぞおおおおお！）

心の中で密かにガッツポーズを決め、何食わぬ顔で僕は鞄から筆記具を取り出した。今日の事を手帳に書いておかねば。

「……斉……どうした……」

「……あぁリュウ？　あいつ……にさ……今頃……病院かもな」

……喧嘩でもして病院にいるのか。つくづく華があるやつだと思ったが、僕には関係ない。そう、関係ない！

「リュウの奴……だって……」

「じゃあしばらく……」

徐々に声が大きくなっていく。そしていつもの会話の渦。

（いつもの、教室、のはずだ）

はずなのに、何かが変わる音がしている。

＊

今日は平穏な日々が過ごせたと思っていたのに、最後の最後に『パシリ』をさせられてしまった。しかもかなりの貧乏くじ。

そう授業が全て終わった放課後、僕は意気揚々と買える準備をしていたのだ。

（今日は何て良い日だったんだろう……幸せだ）

『おい、パシリ』

この声は斉藤リュウの取り巻きの一人。いつもの大将が居ないからといって、僕がパシリなのは変わりがないようだ。

『……はぁ』

『これを届けてくれるよな？』

渡されたのはプリントと問題集。宿題でもしろというのだろうか？

『えーと』

『これを“斉藤リュウ”に届けるんだ。場所は中に入っている紙に書いてあるからな。しっかり届けろよ』

『……はぁ』

取り巻き達は僕にそれを渡すと、またがやがやと喋りながらどこかに行ってしまった。一人教室に取り残された僕は、手渡された資料を見る。いたって普通のプリントに問題集。若干面白みにはかけるが、これから授業で習う範囲を網羅しているもの。

これを誰に渡すんだっけ？

確か……

＊

「斉藤リュウだぞ！！！！　無理だろおおおおおおお！！！！」
「落ち着け大馬鹿者」

お茶をすする音。目の前にはやはり昨日の少女。行儀良くソファーの上で正座をしながら、優雅にお茶を楽しんでいる。いや、問題はそこではない。

「……なんでまだ居るんだ……」
「最初に言っただろうが。わらわの世話をこれから頼む、と。聞いておらんかったのか？」
「……」

そんなさらりと言われても。なぜ僕が全く見ず知らずの少女を部屋に置いておかなければいけないのだ。僕が不満を言おうと思って口を開こうとすると、少女はまたお茶をすすってこちらを見た。

「まぁそれなりにわらわから報酬を渡す。これはわらわにとっても大切なことなのじゃ……。それはそうと、貴様はその斉藤リュウとやらの取り巻きの一人にパシリを頼まれたというわけか」
「……まぁそういうことです」
「情けない翁よ……パシリとは……」

ため息をつかれた。うぅ……なぜ見知らぬ少女にここまで言われなければいけないのか。

「翁、貴様“斉藤リュウ”のこと、何も覚えておらんのか？」
「……どういうこと？」
「まぁお互いが忘れておるようじゃし、仕方がないと言えば仕方がない。所詮記憶などそんなものじゃ」
「……？」

少女はふわりと立ち上がると、玄関の方に向かって歩き出した。
僕も慌てて少女の後を追う。
「ちょ、キミどこに行くの！」
「決まっておろうが、“斉藤リュウ”の所じゃ」

「ちょっ今から！　取り巻きは明日でもいいって……」
もう夕方に近い。今から病院にいくのはさすがに迷惑というものだろう。

「知らん。わらわを止められるなら、止めてみろ」

男前発言。こんな可愛い少女が。
仕方なく僕は後を付いていくしか無かった。

（……“斉藤リュウ”……か）

僕の頭の中に何かが渦巻いているような気がした。

八

病院は意外と近くにあった。自宅からバスで２０分くらいで行けたので、今度病気になったときには是非活用させてもらう。夕方だからだろうか、医者や看護師のどことなく忙しそうな様子が伝わってきた。やはり帰った方がいいのではないだろうかと今更ながら思えてくる。

「斉藤リュウは５０５号室じゃ。行くぞ」

まぁ無理ですが。

諦めて二人でエレベーターに乗る。

「……病院かぁ。何だか久しぶりに来るなぁ」

「なんじゃ、急に思い出したような口ぶりは」

怪訝そうに少女はこちらを見る。伸長がかなり違うので、僕を見上げる形になっているが。

「小さい頃ブランコから落ちて怪我したことがあってさ。その時に病院に来たなぁと思って」

そうだ、ちょうど小学校に通っていた頃だった。うるさい蝉の声が辺り一面に響いていて。薄い水彩画のような記憶がうっすらと僕の記憶を再び呼び覚ます。その時からオーナは僕と一緒に遊んでいたのだ。そう、僕とオーナでブランコに乗っていて……それで、誰かに声をかけられて、一緒に遊んで……あれ、誰だろうキミは……

「着いたぞ」

エレベーターの扉が開く。

「５０５号室は右手じゃ」
「ちょっ……病院だから静かに歩いてよ……」
ぱたぱたと走る少女に思わず注意する。看護士さん達の視線がどことなく痛いのは気のせいだろうか。

【５０５号室　斉藤リュウ】

（一人部屋なのか……）
「たのもー！！！！！」
バアアアアアンッッ
少女が思いっきり扉を開けた。
「おいいいいいいいい！！！　ここは病院だあああああ！！！　もっと静かにしろよおおおおお！！！」
あまりの出来事に我を失って叫ぶ。
「貴様の方が、声がでかいぞ」
「……」
とりあえず僕は急いで扉を閉め、廊下の人気を伺う。……よし、注意する看護士さんはいなさそうだ。ほっと胸をなで下ろしたのもつかの間、僕はある人物のことをすっかり忘れていた。

「……おい」

声の主を見てみると、ここに入院している“斉藤リュウ”その人だった。いつもの決めた顔ではなく、ぽかんとした表情になっている。まぁそりゃそうか。いつものパシリと浴衣のような服を着た変な少女が一緒に部屋に入ってきたのだから。

「……どーなってるんだ……パシリ」

「えーっとですね……これは……」

ドスのきいた声が怖い。どう言い訳したら許してもらえるのだろうかと僕の頭は必死に考える。

「貴様が“斉藤リュウ”か」

少女は腕組みをして仁王立ち。微かに笑みを浮かべながら、どことなく楽しそうだ。

「……パシリ、これはお前の妹か？」

「いや、妹じゃないです。断じて」

そこは斉藤リュウでも譲れない。主張しておかなければ。

「わらわは翁の従妹じゃ」

「……あぁ従妹……」

斉藤リュウはなんだか納得した様子で感慨深く呟いた。いや、納得してもらうと困るんですが。突っ込む時間も無いよ。

「……で、パシリ。俺の病室に来たってことは何か用があったんだろ？」

少女と同じく腕組みをしてこちらを見る彼は僕にとっては獲物を狙う蛇にしか見えない。かろうじてベッドと白い服がそれを止めるストッパーのような効果を果たしている。ひぃぃぃ、怖いからこっちを見ないで欲しいんだけどなぁ。

「宿題運ぶの頼まれたので。プリントと問題集です」

僕が鞄から取り出すと、彼はくくくと笑って受け取った。何かおかしな所でもあったのだろうか。僕が怪訝そうに見ているのが分かったのか、斉藤リュウは口に手を押さえながらこちらを見た。

「いや、な。お前こんな所でもパシリやってんのかと思うとな、ちょっと、可笑しくなってな」

いつもよりも顔が優しい気がする。そんな様子を見て僕は内心焦る。何だかイメージと違うじゃないか。そこに水を差すような言葉が少女から発せられる。

「それは貴様の思い違いというものじゃ。翁は好きでパシリをやってるわけじゃない。さっきもぶつぶつ文句を言っておったぞ」

「ほぉ……」

にやにやと笑いながら少女と斉藤リュウはこちらを見る。

「おいいいいいい！！！　何大切なこと軽々とカミングアウトしてるんだあああああ！！！　そんなこと言ったら後々大変だろうがっ！！」

我を忘れて僕は叫びまくる。さっきから僕はどんだけ大声で叫んでいるのだろうか。そう、斉藤リュウ本人を目の前に「実はパシリが嫌でしたー」なんて口が裂けても言えないのに。というか言ったら後で何をされるか分かったものではないのに。生きて帰れるか分からないというのに。……のにのに。

「真実のことじゃろうが」
「……大人の世界には言ってはいけないことがあるんです……」
「生意気を言う」

その様子を見ていた斉藤リュウが笑い出した。何だ何だ、そんなに面白かったのか今の会話が。

「ははっ……おいパシリぃ。お前言うこと言うじゃねェか」
にやりと笑ってこちらを見る姿に僕はびびりまくる。あぁ終わった……さよなら僕の幸せな日常。

「パシリにそんな度胸があったとはな……意外すぎて笑えるぜ」

その言葉に少女が眉をひそめる。何かが気に障ったのだろう、腕組みをしていた手をほどき、腰に手を当てる。おいおい、今度は何を言い出す気だ。

「貴様……翁のことを『パシリ』と呼んでおるようじゃな」

「まぁパシリだからな」
平然と言いのける。その言葉を聞いた少女は僕をちらりと見る。少女の、鋭くも気高い漆黒の瞳が僕に安心しろと告げる。そして視線を斉藤リュウに向ける。

「ではわらわ達が貴様の抱えている問題を解決してやったら、その時は翁を『パシリ』と呼ぶのはやめよ」

え？

「ほぉ……じゃあ聞くが、俺が何で困っているかを知っているって訳か？　お姫さんよぉ？」
「当然じゃ。わらわ達を誰だと思っておる。その脇にあるパソコンを立ち上げてみろ」
「あぁいいぜ」
斉藤リュウはベットの側に置いてあったノートパソコンの電源を付けた。いつもの聞き慣れた電子音が部屋に静かに流れる。
「……おい、そんなハッタリすぐにばれるぞ……てかばれたら、もう命が危ない……？？」
気が付くと少女が手を握っている。小さく暖かい手が僕を包み込んでいた。
「大丈夫じゃ、わらわを信じよ」
その瞬間僕と少女の周りが徐々に、溶けていく。景色がまるで絵の具のパレットで混ぜたようにぐちゃぐちゃになり、徐々に光のドットが別の空間を作り出していく。電子音が耳に響き、光がそれに呼応するように輝く。そして重力が感じられない。まるで浮いているような感覚。
「参る」
少女が思いっきり僕を引っ張った。その瞬間ジェットコースターに乗ったように、周りの景色が見えなくなる。思わず閉じてしまう目を無理やり開けると、僕の手を握る少女の後ろ姿が見えた。黒髪がたなびき、僕をどこかに連れて行く。光が輝いては横を通り過ぎ

るこの世界はどこか幻想的だった。
不思議と怖さは感じない。
少女とこの宇宙のような空間を、僕は、美しいと思った。

「あった」

少女の声だけがこの世界に響く。

何が？と聞く前に一度瞬きする。

気が付くと僕は、病院にいて、斉藤リュウが目の前にいて、それから、少女が僕の手を握っていて、それで。

「どうしたパシリ。ぼーっとして」
「……あれ……」
さっきまでの景色は何だったんだ？　一体何が起こったんだ？

「大丈夫か？　ここは病院だから、医者に診てもらった方がいいんじゃないか？」
怪訝そうな顔で斉藤リュウがこちらを見る。確かに、その通りかもしれない。色々ありすぎて、ちょっと疲れているのかも知れない。変な女の子に会ったとか、斉藤リュウに宿題を届けたとか、とか……。

「翁のことは心配ご無用。わらわがついておる。それより、わらわと交わした約束を忘れるな」

それだけ言うと、少女はくるりと背を向きドアの方に向かって歩き出した。慌てて僕も後を追おうとしたら、斉藤リュウに声を掛けられた。

「おい、パシリ」
「は、はい」
「お手並み拝見といこうじゃねぇか」

九

僕の前をずかずかと歩く少女。
病院を二人で出てからずっと無言で歩き続けている。街はもう闇に沈んでいる。一定間隔でついている街頭と、明るすぎる月の光が家への道標となっているようで、少し心強い。歩くたびにゆらゆら揺れる黒髪はこの世の物とは思えないくらい綺麗で、僕は息を飲む。

きっとこの少女は、人ではないのだ。

（そろそろ、聞かなきゃな）

僕は覚悟を決める。疑問だったことを解決しなければ、次へは進めない。

「えっと……」
「あそこの公園に行ってもいいか？」

少女が向こうにある公営公園を指さした。さすがにこの時間なので誰も遊んではいない。
僕の返事を待つことなく少女はぱたぱたと公園へ走り出した。そんなに遊具で遊びたかったんだろうか……。

少女はブランコに座り、ゆっくりこぎ出した。僕もその隣りのブランコに腰掛け、少女が楽しそうにこぐのを見つめる。ブランコの懐かしい鉄の感触が手に染み渡る。

キーイキーイと夜の公園に寂しげに音が響き渡る。

「……感謝している」

ふいに少女から言葉がもれる。

「貴様が困惑していることは、知っている。それは当たり前のことじゃ。誰だってこんな奴がいきなり現れたら驚くじゃろう」

「まぁ……ね」（そりゃびっくりするだろう）

「でも……それでも、わらわは、“存在”したかったのじゃ。それだけは紛れもない事実。そのためなら貴様を利用することも、わらわには出来る」

「利用って……ヲイヲイ……」

少女は少し笑いながらこちらを見た。いつもはきつい眼が少し柔らかくて、僕はどきりとする。ブランコが揺れるたびにふわふわ揺れる着物も、月夜に照らされる白い肌も、どこか彼女を人ならざる存在にさせている。

「そのくらいわらわの覚悟が堅いことを覚えておいて欲しい。この先何があっても良いように」

「何かって……そんなに危険なことなのかよ……」

「でも、その分の十分な見返りは当然するつもりじゃ。この世界で誰も敵わないような、そんなレベルの話じゃ」

「……理解が追いつかない……。一体キミは何者なんだよ……」

ふいに少女はブランコを止める。そして、僕を見る。

「わらわは人ではない。電脳世界に住む“月の住人”じゃ」

「電脳世界……？」

「そうじゃ。翁らがいつも使っているパソコンは、あくまで画面を通しての表面的なものに過ぎない。文字があり、それを理解し、映像を見て、自分で画面に文字を打ち込むしか出来ないじゃろう。だが、貴様こういう経験はないか？　ネットで色々な所を巡っているうちに、いつの間にか時を忘れてしまっていたということは」

「それは何度もある……気が付けば朝だったとかしょっちゅうだしなぁ……」

「その時はただ目の前の小さな画面を見ていたなんて思っておらぬじゃろう？　頭の中で認識されたのは補完されたイメージ映像であって、ただの画像や文字ではない」

訳が分からなくなってきた。難しい話はどうも苦手だ。

「つまり、電脳世界は意識の世界。その人の意識のみを切り取って、ネットという空間で彷徨っているのじゃ。そこには色々な人がいて、日々ありとあらゆることを創り出していく。
無限に続くクリエイトの宇宙、それが電脳世界じゃ」

うーん、やっぱりよく分からない……。

「とりあえず、もうちょっと簡単に言ってもらってもいいですか……」

「つまりドラ〇もん的四次元空間がネットの世界に広がってて、わらわはそこの元タイムパトロール的な存在だったといえば、翁の頭でも理解出来るじゃろう」

あぁなるほど。分かりやすい。

「タイムパトロールって？」

「今言っても貴様は理解出来ないじゃろうが。とにかく、わらわはとある事情があって、電脳世界に居られなくなった。それでリアル世界である、こちらに来たのじゃ」

「じゃあ、その体は、その、何て言っていいのかな？　……生身じゃないってことになるのかな？」

「もちろん。これは物質を組み合わせて立体映像に見せているだけじゃ。だが、わらわの意識はこの中に宿っておる」

ぎゅっと胸の当たりで手を握る。目の前にいる少女が実は映像で見ているだけで、実際には存在していないなんて僕には理解し難かった。でも確かに僕の目の前には黒髪で、気高い眼で、綺麗な着物を着ている一人の女の子がいる。たとえ電脳世界から来ただの言われようが、それは事実だ。

「キミ……名前は？」

「名……か。……忘れた。もうあれはいらぬのじゃ。だから、名は、無い」

「名前が無いって……なんて呼べばいいんだよ」

「好きなように、呼べ。貴様が名を付ければよい。所有者は貴様一

人じゃからな」
「そんな急に言われたって……」
「まぁ名など所詮、個体を識別するための記号にしか過ぎぬからな。あまりこだわるな」

自虐気味に笑う少女に僕は違和感を覚える。少女は一体何者で、どんな事があってこの世界に来て、僕と出会って。よく分からないことだらけだ、正直。

でも少女の言葉に、僕は、心の中で否定する。

「それよりもだ、翁。貴様に世話をしてもらう代わりに、わらわはその見返りを用意しよう。この力を使えば、電脳世界では無敵に近いじゃろう」

「何かファンタジー的なノリになってきたな……」

僕がため息をつくと、少女はブランコからひょいと下りて僕の前に立った。そして指をぴっと天に指し、不敵な笑みを浮かべる。

「明日、楽しみにしておれ。わらわが貴様を『パシリ』から解放してやる」

十

翌日僕は少女に連れられて、ある店の前に立った。
閑静な住宅街にある小さな喫茶店で、レトロな趣がこの街とマッチしている。表には小さく『喫茶店　ルナ』と書かれている。赤煉瓦の壁に絡むネイビーの葉と、表に置かれた植木鉢の花々が訪問者をさりげなく出迎えていた。

とっても良い。普通に喫茶店として入りたい。

「でもどうして僕はこの店の前に立っているのかが分からない」

僕の隣には少女。今日は例の着物姿ではない。
いつの間にか少女の服は黒のフリフリドレス姿に変わっている。ヘッドドレス、厚底の靴、日傘、……ゴスロリって言ったっけ、こういうの。
本人曰く、『物質を集めて構築することで、自由自在に存在に服をクリエイトすることが出来る』だそうだ。というか、着てみたい服が色々あるらしい。

「これが斉藤リュウが困っている原因じゃ」
「だから、どういうこと？」

「とっとと入らんか。この大馬鹿者」
少女は沸点が低いらしい。

僕は仕方なく、喫茶店のドアを開ける。カランコロンと涼しげな音がして、白檀の香の香りがふんわりと漂ってきた。長年大切に使

われてきたであろう椅子やテーブルが、ちょうどよい間隔で並べられている。白いテーブルクロスが眼に眩しい。

（素敵なお店だなぁ……これは店主の方の趣味が良いなぁ）

「いらっしゃーいませー☆」

……え。

カウンターから出てきたのは、短髪の青年。耳にはピアスをジャラジャラ付け、眼は細めで口元は営業スマイル。一応黒いエプロンを付けてはいるが、明らかに違和感があることは間違いない。

「さぁさぁ席に座って座ってー。何にいたしましょ？　コーヒー？紅茶？」

あっけにとられて言われるがまま席に着く。

「ミルクじゃ」

堂々とした注文。さすが、姫。

「よろこんでー☆」

……居酒屋じゃないんだから。

「……本当にこれが斉藤リュウが困っている原因なのか？」

「そうじゃ、わらわに間違いは無い」

「ん？　もしかしておたくら、アニキのお知り合いですかい？」
「アニキって……」
「どうしたの、室戸君？」
カウンターの奥からショールを羽織った老婦が杖をつきながら歩いてきた。
「あぁイズミさん、出てきちゃだめっすよ。ゆっくり寝てて下さい」
慌てて青年が止めに入る。
「あら、お客様がいらっしゃったのね。あら……貴方？」
僕の顔をみて老婦が少し驚いた顔をする。知り合いかと思ったがどうにも記憶がはっきりしない。そんな老婦の様子を全く無視して、青年は肩に手を置き諭すように言う。
「とにかくイズミさんは寝てて下さい。貴方に何かあったらオレはアニキに顔向け出来ないっす」
「ふふ、大げさねぇ」
青年と老婦はカウンターの奥に入っていった。
「……おいおい、どーなってんだ……」
僕はアンティークドールのような少女を見る。この喫茶店の雰囲気に妙にあっているのがまた可笑しい。
「つまりじゃ、この店は斉藤リュウの祖母である斉藤イズミがやっている喫茶店なのじゃ。病弱な祖母の代わりに斉藤リュウが店の手伝いをしておったらしい。今回斉藤リュウが困っているのは、交通

事故で怪我をしてしまったから店の手伝いが出来ないことなのじゃ。ちなみに祖母と斉藤リュウの二人暮らしで、両親は離婚しておる。弟がいるらしいが、定かではない」

なるほど。意外な斉藤リュウの一面を覗いてしまった。というか何か大変な家庭事情を聞いてしまった。

「どーやったらそこまで個人情報が分かるんだよ……」

「一度翁も体験したじゃろう？」

「……もしかしてあの病院の」

「そうじゃ、あれがわらわの存在価値であり、最大の能力。わらわはどんな情報でも盗み見ることが出来る。電脳世界の検索能力でわらわに敵うものはいない。

そして、リアル世界にいる人間を意識を分解して電脳空間にも連れて行くことが出来る」

おいおい本気かよ……。オーナと一緒に学校に行った朝のことや、この店に来たことが少女の証言を証明していた。

「ここで貴様がすることは一つ。この店の評判を守り続けること。まぁ助っ人は呼んであるから大丈夫じゃ」

「評判って……」

「お待たせしやーした☆　お嬢様はミルクでしたよね。そちらの御紳士は？」

「あ、じゃあ、コーヒーお願いします……」

「よろこんでー☆」
……だから居酒屋じゃないってば。

がちゃがちゃと不慣れな音がキッチンから響いてくる。どう贔屓目にみても、これは危ない。飲めるものがちゃんと出てくるのだろうか……。

「いやーオキャクサン、久しぶりに来てくれて嬉しいっすー」
「……久しぶりなんですか……」
「そうなんすよー。アニキに頼まれてから、このお店をやらせて頂いてるンすけど、オレが入ってから誰も来なくなっちゃって。顔がマズイんすかね？　アハハ」
多分全てがこの雰囲気に合わないのだと僕は心の中で突っ込む。

「安心せい、室戸弥彦。わらわ達は斉藤リュウに言われて貴様を助けにきたのじゃ」
言われたというか、こちらが一方的に提案しただけなのだが。またしてもハッタリをかます少女。

「えーっっ！！！　マジっすか！　アニキ……やっぱりオレを心配してくれてたんすね……感動……」
一人で自分の世界に入ってしまっている。その様子を僕は若干ひきながら白い目で見る。

それにしてもどこかで、室戸という名前を聞いたことがある。
「室戸って……」
「室戸弥彦、斉藤リュウの熱狂的信者。貴様の学校の六組に所属しておる。性格はふざけ気味だが成績は優秀で、学年のトップスリー

の常連じゃ」

「……あー！！！　あの室戸！　どっかで聞いたことのある名字だと思った」

「なんすか？」

室戸本人は全く気が付いていないらしい。まぁその方がこちらとしても都合が良い。下手に僕が『パシリ』だとばれると、面倒くさいことになるかもしれない。

「とにかく、わらわ達はこの店を手伝うことになる。それで良いか？」

「もちろんっす！　アニキに間違いは無いっすからね！　正直オレこのままじゃ店の評判を落としまくっているんじゃないかと思ってた所なんすよ。そうなるとアニキに顔向け出来ないし、ホントどうしよーかなーとか」

意外と原因分かってるじゃないか。

「おいおい……僕はバイトすらしたこと無いぞ……そんな安請け合いして大丈夫なのか？」

「貴様に接客をやらせるつもりは全くない。その為の助っ人がもうすぐ来るはずじゃ。わらわが貴様の数少ない知り合いの中で一番コミュニケーション能力が高いと判断した人物」

「そんな人いるか……」

「こんにちはー！　ミヤ君メール見たよ！」

ばんっと音を立てて、僕の幼なじみであるオーナが店に入ってきた。うん、確かに社交性は一番ありそうだ。それにしても僕はいつメールなんて送ったのだろうか。

「わらわが貴様名義のメールを勝手に送っておいた。いつもなら使わない絵文字も満載でな」

「おいいいいいい勝手なことしてんじゃねぇよ！　あれか、情報検索能力とかいうやつか！　何でも分かっちゃう能力ってやつか！　絵文字は恥ずかしいからやめてくれ！　頼むから絵文字だけは！」

「ミヤ君ここでバイトするんだってー？　オーナもぜひ一緒にやりたいな！」

ふんわりとわらうオーナ。それは良いが、少しはメールに疑問を持ってくれ。

「あれーそこのレディはもしかして、二組のミス大名嬢じゃありませんかぁ」

室戸がオーナの顔を見てびっくりしたように言う。

「確か六組の室戸くん……だったかな？　初めまして！」

「うわーミス大名嬢とお知り合いになっちゃいましたよー。感激！　室戸弥彦っす、以後お見知りおきを」

まるで西洋の貴族のごとく大げさに挨拶する室戸。おいおい……僕はもう全てについていけないぞ……。

「ではこれから命令を与える。オーナは接客担当、翁はカウンター担当、……室戸は奥の部屋でコーヒー豆でも挽いておれ」

「分かった！　一緒に頑張ろうねミヤ君！　ミヤ君の従妹さんも！」

「う、うむ……」

オーナに尋ねられた時だけ俯いてしまう少女。何なんだろうこの格差は。

「豆挽きまかせてくださいっす！　こう見えても力は案外強いっすよ」

力任せで豆を挽かれてもなぁ……。まぁ無難な配役といったところか。

そして僕の何だか分からないバイト生活が幕を開けるのだった――

十一

毎日同じ生活の繰り返しだった。
そう、つい一週間前は。

「おい『パシリ』」

来た。いつものいじめっ子集団（斉藤リュウの取り巻き達とも言う）。

しかし僕の放課後はもう暇ではない。急いでバイト先である『喫茶店　ルナ』に向かわなければいけない。そうしないと――

ダーンダーンダーンダダダーダーダー

携帯の着信音が鳴る。この合図は、あの高慢ハッタリ少女からと設定してある。つまり僕にとっての最終警告。取り巻き達が何かを言っているがそんなことはお構いなしに、僕はメールを開く。

〈十分以内に来るのじゃ〉

ひいいいいっっ。これはマジのメールだ。多分行かないと大変なことになる。何しろ僕の行動は少女の情報探査能力で筒抜けなのだ。何処で何をしていたかなど全てお見通しらしい。

「おい聞いてるのか『パシリ』」
あまりの無視加減に取り巻き達が痺れを切らして僕に話かける。聞いてるし、分かってる。でもそれ以上に今は大切なことがあるんだ、分かってくれ。
「すいませんが……今日は……『パシリ』は……出来ません……っ！」
そう取り巻き達に宣言し、僕は鞄を持って一目散に駆けだした。今からチャリで飛ばせば何とか十分以内には間に合いそうだ。そう思った途端、僕は自分が改めて何をしているかということに気が付いた。

以前なら必ず彼らの言うことを聞いて、そしてパシリをして。何となく満足感というか、間違った達成感を得て。それで良いと思っていた、それがもう当たり前になっていた。

でも今僕は彼らのパシリを、断ったのだ。

確かに、僕の中で、何かが変わっている――

＊

その様子を見て驚くのはパシリを断られた取り巻き達も同じだった。いつもは従順に従っていた飼い犬が急に牙を向いた。

「どーなってるんだ……あの『パシリ』が……」

＊

「ごめん！　遅くなった！」

僕が勢いよく扉を開けると、中にはエプロン姿のオーナが紅茶を入れている最中だった。お客は、いない。

「あれ……客は？」

「貴様が遅れてくるから、つい一分前に帰ったぞ」

美味しそうに紅茶を飲んでいる少女が僕に視線をよこした。今日はピンクのフリフリ甘ロリータ姿だ。

「そんなに大変じゃなかったし大丈夫だよ、ミヤ君」

「今日は室戸さん来てないの？」

「奴なら今日は塾じゃ。親に言われて嫌々行っているらしいが、全く役に立っていないみたいじゃな。授業を受けている間はほとんど寝ておる。唯一の楽しみが塾の前にあるコンビニでお菓子を買うことだそうだ」

「だから人の個人情報を簡単に見るなよ……」

急いで黒いエプロンに着替え、カウンターに立つ。

ゆったりした時間がこの部屋に流れているのが分かる。ポコポコと沸くお湯、窓からうっすらと入る木漏れ日、光を受けて煌めく食

器達。どれもこれも主人に大切に使われてきた物達ばかりで、改めてこの店のオーナーである斉藤イズミの趣味の良さを感じさせる。

「良いお店だなぁ……」

「ふふ。ありがとう」

声のした方を振り返ると、柔らかな笑顔を浮かべながら斉藤イズミが奥の部屋から出てきた。

「イズミさん！？　寝て無くて良いんですか……？」

僕が慌てて彼女の方に駆け寄ると、イズミはまた笑った。

「大丈夫よ。みんなして大げさなんだから。リュウも、室戸君も、そして榊ミヤツコ君あなたもね」

「え……？　僕の名前……」

「ふふ、さぁ何故でしょう？」

そういうと彼女は白いテーブルクロスが掛けてある席までゆっくりと歩き、腰を掛けた。慌ててオーナが彼女の前に入れたての紅茶を注ぐ。

「ありがとう。大名さん」

「どういたしまして！」

どうなってるんだ？　何で僕の名前だけでなく、オーナの名前まで知ってるんだろう。彼女に自分の名前を告げた記憶がどこにもないのに。

「翁、貴様の記憶を良く探してみよ。彼女はどこかにいるはずじゃ」

「記憶……」

オーナと老婦が昼下がりに喋っている風景。何かが僕の心の中で被さる。前にも見たことがある。それは確かなんだ。でも濁ってしまった川のように、あともう少しの所が見えない。僕は何でこんな大切なことを忘れているのだろうか。

少女が僕の手をそっと握る。

「仕方がない奴だな。一緒に検索してやる」

その瞬間、僕と少女だけが電子の宇宙に投げ出される。電脳世界というのは何て優しい世界なんだろう。音もなくただ光る光と次々と映し出される映像が僕の記憶を呼び起こす。

僕の足下に『検索ワード：斉藤イズミ』『：過去』『：オーナ』『：斉藤リュウ』というワードがチカチカ点滅している。

「電脳……世界」

「そうじゃ。これが意識の世界“電脳世界”。さて、この世界ではわらわは長居は出来ぬ。さっさと検索してリアル世界に戻るぞ」

少女が僕の腕をぐいっと引く。次々に僕の目の前に過去の記憶の断片が映し出される。写真を早送りにして見ている様な感覚で、くらくらしてくる。

「しっかりしろ。何か他に検索出来るワードは無いのか？」

僕は必死になって記憶を辿る。オーナと老婦が一緒にいる風景。そして、斉藤リュウ。昼下がり。僕の中に響く、蝉の声。

「夏。あれは夏のことだ。確か僕とオーナは一緒に公園で遊んでいて、そして、そして」

僕が声に出すと、周りの景色が目まぐるしく変わる。

――――

〈わぁぁぁぁぁぁ〉
〈みやくん、もういたくない？　だいじょうぶ？〉
ブランコから派手に落ちた僕に絆創膏を貼ってくれるオーナ。そうだ、小学校に入ったばかりの頃だ。このころの僕は本当に泣き虫で、何かあるとすぐに泣いていたんだ。
〈大丈夫か？　待ってろ今病院に連れて行ってやるよ〉
〈そうね、リュウ。ミヤ君をおぶってあげて。大丈夫よ、すぐに良くなりますからね〉

リュウ……？

〈全くミヤはすぐに怪我するな。明日から俺がいないっていうのに、大丈夫なのかよ〉
〈何で明日行っちゃうの？　同じ小学校でいいじゃんか〉
〈そうふくれるなよ。俺だって嫌なんだ。仕方がないんだよ、もう。だからな、強くなれよミヤ〉
僕の頭を撫でる優しい手。寂しそうに笑うその顔。

〈イズミさん、これで大丈夫かなぁ？〉
絆創膏を大量に僕に貼るオーナ。いくらなんでも貼りすぎじゃないかなぁ。

〈ありがとう。大名さん〉
〈どういたしまして！〉

――

あれっ今の会話は……。

「ようやく思い出したか？」
白いレースの服がひらひらと揺れる。全身が白い衣で包まれているというのに、髪と眼だけは漆黒の
黒。その瞳が広大な電子の宇宙と僕を映し出している。

「……そうだった。何で忘れていたんだろ、斉藤リュウと僕は昔、友達だったんだ」

十二

あの日、僕はオーナと公園で遊んでいた。
いつものように僕はドジをやって、ブランコから落ちて泣いていた。その様子をなだめるためにオーナは絆創膏を僕に貼っていた。

――明日リュウが引っ越してしまうから。
――明日友達が一人消えてしまうから。

僕は、悔しかったんだ。

「忘れたくなかったのに、僕は忘れていたんだな。そうやって色々な人を忘れて、僕はいつしか一人になって、そしてネットの海に彷徨いこんで」
そこでの人格がリアルを忘れさせるほどに大きくなってしまった。

僕はいつから現実を忘れてしまったんだろう。

「翁、データが消えることなんて容易いことなのじゃ。【消去】のボタンを押してしまえば永遠に消える。リアルの世界からも、電脳世界からも。
でも、消えてしまった後はどうすればいいのじゃ？　今まで感じてきたこと、創り上げてきたこと、相手と過ごした時間。それらが初めから無かったこととして、どこかに消えてしまうのじゃろうか」

「――っ」
少女の名を呟こうとして、僕は初めてそこで少女の名が無いことに気が付いた。
前に少女は言った。名前など所詮、個体を識別するための記号にしか過ぎぬ、と。

「でも、違うじゃないか」
「え？」
「イズミさんはずっと僕たちの名前を覚えていてくれた。その時に呼んでいたままで。僕は斉藤リュウのことを忘れていたけど、リュウのことを思い出した。消去させなければいい。いつまでも思い出せるように」

「……ミヤ」

初めて僕の名前を呼ばれる。
そうだ、僕の名前は榊ミヤツコ。

そして、この少女の名は――

この電子の海に浮かび上がり、白い衣を纏う。それはまるで天女のようで、そして美しい。だけど何かに追われる運命を背負った少女。僕の目の前にいきなり現れて、勝手に僕の世界を変えて、取り戻してくれて。
「キミの名前、カグヤはどうかな？　まるで竹取物語のかぐや姫みたいじゃないか。いきなり来てさ、養えなんて」

「わらわの名は……カグヤ？」

「あっでも竹から生まれてないな。まぁ細かいことはスルーで。てかもうそろそろ戻らないと！　お客が来ないとマズイしな！」

何となく気恥ずかしくなって、僕は眼を泳がす。

周りの景色が溶け出す。カグヤはもう一度僕の手を握りしめる。

リアルに戻りつつある意識の中で、僕は微かに声を聞いた気がした。

――ありがとう、と。

十三

謎のバイトをしてから二週間がたち、今日は斉藤リュウが退院してくる日だそうだ。

僕達はイズミさんと一緒に『喫茶店　ルナ』で彼の退院祝いをすることになっていた。取り巻き達の視線を感じながらも、僕はいそいそと帰る支度をする。

最近は取り巻き達に『パシリ』を言われることは少ない。やはり彼らには“斉藤リュウ”という錦の御旗が必要で、それがないと何も出来ないということに僕はようやく気が付いた。取り巻き達が何かを言っているが僕はお構いなしに喫茶店へと向かった。

（こうやって、堂々としてれば良かったんだ）

あそこの角を曲がればもう喫茶店だ。

「おい」

後ろを振り返ると、おっかない顔をした取り巻き達が揃っている。しまった、後をつけられたか。後もう少しで喫茶店なのになぁ、運が悪いよ……。

彼らはずかずかと僕の目の前に来て、意図も容易く胸ぐらを持ち上げる。

「おい、最近どうしたっていうんだよ！　前は素直に言うこと聞いてただろうがぁ！」

「何とか言えよ！」
「『パシリ』！」
あぁジ・エンド。今日の朝にやってた占いは一位だったのになぁ……。やっぱり僕はこういう運命だったのか。
「……おい、お前等なに営業妨害してくれてんだぁ？」
ドスのきいた低い声。誰よりも威圧感があり、風格を漂わせる声。
「さ、斉藤、斉藤リュウ！」
取り巻き達に一気に緊張が走る。
「人が退院帰りで気持ちよく羽を伸ばしてる時によ、全く目覚めの悪いもん見せんじゃねぇよ。
『パシリ』お前も病院で見せたあの勢いはどこいったんだよ？」
「え？」
「あんときのお前は凄かったじゃねぇか」
にやっと笑う斉藤リュウは、僕の記憶にあるあのリュウだった。
そうだ、僕は、僕の名前は――
「『パシリ』お前まさか斉藤リュウを呼んでやがったなぁ！」
いかにも飛びかからんとする取り巻き達の前に僕はすっくと立つ。
言わなければ。今言わないでどうする？
一生パシリでいいのか？　パシリとして記憶に残しておいていいのか？
「何とか言えよ『パシリ』！」

「――『パシリ』じゃない！！！！！」

「……っ！？」

カグヤ、キミが教えてくれた。だから僕は正々堂々と僕の名を名乗りたいんだ。

「僕の名前は……榊ミヤツコだあああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

はぁはぁはぁ。

辺りに謎の沈黙が流れる。この空間だけ時が止まったみたいだ。取り巻き達も、斉藤リュウもぽかんとした表情で僕を見ている。

「……」

改めて考えてみるとかなり恥ずかしい。しかしもう後には引けない。というか引けない状況になってしまった……。

「何じゃ恥ずかしい奴じゃの、翁。見ていて恥ずかしくなるわ」

カツカツと現れたのは赤いヘッドドレスを付けて、今日もフリフリのロリータ姿に決めたカグヤだった。その後ろにはオーナや室戸さん、イズミさんもいた。

「アニキいいいいいいいいい！！！！　退院おめでとうっすー☆
この室戸弥彦、精一杯アニキの代わり勤めさせて頂きました！」
「ミヤ君ーどうしたの？　早くパーティー始めようよ？」
「リュウ、お友達を虐めちゃいけないでしょう？　全くあなたは昔から……」
口々に喋られて何が何だか分からない。
「んっアニキ、もしかして喧嘩っすかぁ？　退院帰りを狙うなんて、何て卑怯な奴等なんすか！　これはフルボッコフラグが立ってますねー☆」
ぽきぽきと手を揉む室戸にリュウは深くため息をつく。
「頼むからこれ以上揉め事を起こさんでくれ……」
カグヤが取り巻き達の前につかつかと歩く。そして赤い日傘を閉じ、まるで閻魔大王が宣告するかのごとく高らかと言い放った。
「貴様等、早くどっかに行かんか。目障りじゃっ！」
「ひいいいいい」
そりゃ逃げたくもなるだろう。僕も彼らも想定外のことばかりだ。
「さてと、リュウ。お帰り」
「ただいま、ばあちゃん。苦労かけてすまなかった」
「皆さんさっそくパーティーしましょう！　いっぱいご馳走用意したんですよ！」
オーナが嬉しそうにエプロンをひらめかせた。

「そうっすよアニキ！　オレが力一杯挽いたコーヒー豆、是非ご賞味下さい！　何たって三時間以上挽いた力作っすからね☆」
「怨念がこもってそうだな……」

喫茶店に向かって歩く。
僕の隣りではカグヤがいる。

「カグヤが来てから、僕の生活は何もかも変わったよ」
「だから言ったじゃろう？　わらわは十分な見返りを用意すると」

にやっと笑うカグヤに僕はゆっくりと笑う。

「……十分過ぎるくらいだよ、カグヤ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2986v/

名をば榊ミヤツコと！

2011年12月31日21時48分発行